

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780477

研究課題名(和文) 社会人の留学振り返りから検証するグローバル人材再定義と留学支援体制の強化

研究課題名(英文) Examination of study abroad experiences on career outlook and strengthening its support

研究代表者

岩城 奈巳 (Iwaki, Nami)

名古屋大学・国際機構・教授

研究者番号：50436987

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は留学経験を持つ社会人を対象に留学振り返り調査を実施し、現行の留学支援体制を再検討することであった。研究期間中、在学期間のみで完結していた留学前・中・後の3段階による「留学支援体制」を見直し、その中に「社会人」を入れて4段階に分け、支援体制の再構築を行った。「社会人」期間では「在校生との留学についての討議」「社会人同士のネットワーク構築と討議」等を導入し実社会における留学経験の具体的活用方法とその位置づけ再認識するきっかけを社会人に提供した。その知見を在校生に対して、「役立つ、活かす」具体例として提示し、社会人と在校生の双方にとって有益な仕組みを構築した。

研究成果の概要(英文)：This research examined the university alumni who experienced study abroad during their college year and how study abroad affected their career outlook. While most universities support before, during and after (until graduation) study abroad, there is almost no follow up research on how they make use of their experiences at work or how it affected their career choices. This research therefore interviewed 32 alumni with a year abroad experiences currently working and asked them to reflect on how study abroad affected their career choice. Not only the results were useful to the current students who will start study abroad, but also to the alumni to reflect on their experiences several years after graduation.

研究分野：国際教育

キーワード：交換留学 社会人留学経験者

1. 研究開始当初の背景

現在、「グローバル人材」は国や様々な組織によって定義づけられ、その定義をもとに各大学は人材育成に試行錯誤している。この定義は、1)語学力・コミュニケーション能力、2)主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、3)異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ(2011年6月、内閣官房グローバル人材育成推進会議)等を含み、これらの要素が新卒社会人に備わること求めている。諸大学でのグローバル人材育成の典型的方策としては、シンポジウムや正規授業に国際企業・団体の上級管理者を招聘し、グローバル人材を議論する機会を設けることが一般である。しかしながら、講演する人物の役職/職務は実務現場から離れた場合が多く、漠然的にしか論じられていないことが指摘されている。つまり、実務現場で求められるグローバル人材像が依然として不明確であり、それゆえ現行定義も曖昧なままなのである。この結果、未だ大学と学生は、本来あるべき「グローバル人材像」が理解できずにいる。この不明瞭さが一因となって、人材育成を担う大学の方策は、漠然的な講義や語学力向上対策等の表層的な人材育成の仕掛け作りから脱却できていないと考える。

一方で、国及び各大学はグローバル人材を育成する主策として、日本人大学生の海外留学を推進している。大学内の留学支援の仕組みとして、留学前・中・後の3段階に分け、「語学向上」、「異文化適応」、「専門的学術知識」、「社会人基礎力」及び「就職活動」等の教育・情報提供することが主流となりつつある(Paige, 2004)。例えば、名古屋大学では、「留学希望者向けTOEFL/IELTS講座」、「留学前定者への異文化理解講座」、「留学中の学生への心理的ケア」、そして、「帰国後の学生ネットワーク構築」を実施し、学生を支援している。また、諸外国では自身の留学経験を振り返り、進路選択へ活用する「unpacking」(Gardner, 2011)が活用され始めている。国内大学では、現行の支援体制と連動させて、学生の成長度合いを自己分析する「e-ポートフォリオ」等の導入をし始めた大学もある(明治大学、東洋大学、法政大学、立命館アジア太平洋大学等)。しかし、これらの仕組みは一定の効果を生み出す一方で、留学支援体制としてはまだ発展段階と言える。

留学支援体制が発展段階である理由は、留学経験者の「卒業後、留学経験が実社会で具体的にどう役立つか」について、ほとんど実態が明らかにされておらず、その知見が現体制に還元できていないことにある。そして、現体制が学生の在学期間のみ限定されていることにある。日本学生支援機構の『海外

留学経験者追跡調査』(2005, 2012)は「留学と社会人経験の関連性」について、量的な調査を実施しているが、具体的事例を集約・分析する段階には至らず、グローバル人材を再考し、社会人の具体的知見を現留学支援体制に導入する材料としては不十分である。グローバル人材とは、「学生時代に培った留学・国際経験を実社会で発揮できる人材」であること想定すると、留学経験者の実社会における留学経験の具体的な活用事例を明らかにし、在学期間と社会人期間を連結させて、「グローバル人材育成」と「留学支援体制」を考えていく必要がある。すなわち、今日のグローバル人材論や留学支援体制の滞りは、留学経験をもつ現役社会人の知見や実経験を大学教育の枠組みに取り入れず、反映できていないことにその原因があると伺える。

2. 研究の目的

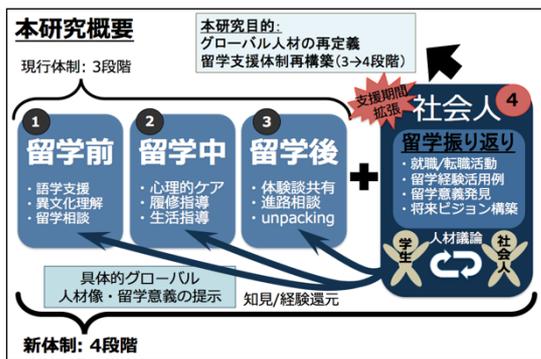
先に述べた背景により、グローバル人材育成が思ったほど伸びない中、本研究では期間内に以下について明らかにすることを目的とした。

1. 社会人を対象とした「留学振り返り」の現状調査(国内/外)と本研究への応用

国内/外大学の留学経験者へのキャリア支援の実態調査・文献先行研究をもとに、留学経験のある社会人に対してどのような「留学振り返り」作業が実施されているか、その具体的手法と要点を明らかにする。既に社会人向けに、6,000人規模の「留学振り返り」を実施している米国大学の関係者に聞き取り調査をし、事例を参考に日本社会人への応用方法を考案する。また、「unpacking」を実践している大学を訪問し、ここで得た具体的手法と要点をもとに、以下で実施する社会人対象の「留学振り返り」の調査アンケート作成と指標を作成する。さらに、現行の留学支援体制(3段階:留学前・中・後)に第4段階目の「社会人期間」を反映させ、円滑に連結する方法を考案する材料とする。

2. 留学振り返り調査をもとに「グローバル人材」の再定義と「留学意義」の再考

本学より交換留学を経験して卒業した社会人(約100人)に対して、「留学振り返り」の調査を行い、その情報をもとに「グローバル人材」と「留学意義」を再検討し、その関連性を見出す。具体的には、該当社会人に「留学後の就職活動」、「留学経験が職場で活かされた具体的事例」、「現在認識している留学についての見解」などの項目について具体例を聞き取る。集約した情報をカテゴリー別にデータベース化し、その後、諸外国の先行事例(例:米国ミネソタ大学、ミシガン州立大学)と調査結果を比較した上で、「グローバル人材」再定義と「留学意義」再考を図る。



3. 卒業後の社会人期間まで延長した留学支援体制の構築

日本国内/外の「留学振り返り」の実態調査・文献先行研究と申請者が実施する社会人(卒業生)への「留学振り返り」調査でまとめたデータを整理し、在学期間だけで完結していた留学前・中・後の3段階による従来の「留学支援体制」を見直す。具体的には、社会人(5年以内)の期間を新たに設定し、留学前・中・後・社会人の4段階に分けて、支援体制の再構築を行う。延長させた「社会人」期間では、「在校生との留学についての討議」、「社会人同士のネットワーク構築と討議」等を導入する。これによって、実社会における留学経験の具体的活用方法とその位置づけを再認識するきっかけを社会人に提供する。また、その知見を在校生に対して、「役立つ、活かす」具体例として提示できる仕組みを構築することで、社会人と在校生の双方にとって有益な仕組みとしていく。また、システム構築の際は、企業からの視点も取り入れる。

3. 研究の方法

本研究は以下に沿って実施した。1年目の研究は以下である。

I. 国内/外における社会人の「留学振り返り」の実態調査と先行文献研究

留学後の支援体制について書かれた国内外の先行論文を精読し、国内での取り組みを調査するために複数の大学を訪問し、情報収集及び意見交換を行った。更に、ミネソタ大学、ミシガン州立大学、国際教育交流の情報が集結する国際学会 NAFSA (北米) 及び APAIE (アジア) に出席し情報収集を行った。

II. 社会人への「留学振り返り」のインタビュー及び質問項目開発

文献の先行研究と国内外の現状調査と同時平行して、7月より卒業生を対象とした留学経験についてのパイロット版アンケート作成に着手、12月にパイロット版を完成させた。このアンケートでは、「留学後の就職活動」、「留学経験が職場で活かされた具体的事例」、「現在認識している留学についての見解」、「現在のキャリアと留学との結びつき」、「今の立場から考えるグローバル人材論」等

を含め、包括的に社会人の現在の経験と留学を振り返る内容にし、得た結果は、研究補助者によるデータコーディング、入力をおこない、分析を実施、調査項目を抽出、選定した。
III. 卒業生への連絡網の整理と「留学振り返り」インタビューの試行

完成したパイロット版アンケートをもとに社会人数名にインタビューを実施した。個人に対して調査する方法と集団ディスカッションベースにて調査する方法を比較し、そのバランスを見極めた。

2年目の研究は以下である。

I. 社会人本調査実施、アンケート及びインタビューデータ分析

1年目のパイロット版アンケートに修正をかけ、本調査を行い、1) アンケート事前記入、2) 個人インタビュー、3) グループディスカッションの段階にわけ、1ヶ月に1組(4-5名程度)を目途に実施した。

II. グローバル人材の再定義及び留学支援体制システム作り (トライアル)

蓄積している現状調査と先行研究、そして社会人への調査をもとにグローバル人材の再定義を試みた。I.にて收拾し、蓄積した情報をカテゴリー化及びデータベース化し、留学前・中・後 + 「社会人期間 (5年間以内)」の、4段階目に入る社会人を取り入れたシステムのパイロット版を作成した。4段階目となる、在校生と社会人との討議、社会人との連携及び在校生への還元について、トライアル参加者からのコメントを反映させ、留学支援体制システム作りに着手した。

最終年の研究成果は以下である。

I. 社会人本調査実施、アンケート及びインタビューデータ分析

計画 I. を継続して行い、アンケート及びインタビューを実施、蓄積されたデータを分析した。また、企業が求めるグローバル人材像、育成論、さらに、大学への要請等の調査を行うため、申請者の大学の就職支援室と連動し、複数の企業を訪問し、聞き取り調査を行った。

II. 成果について学会発表、論文投稿及びシンポジウム開催

本調査の最終成果を学会にて発表し、多くの質問、賛同を得ることができた。また、関連する紀要に収集したアンケートを分析した内容を中心とした論文を投稿した。本研究を総括する最終形として、留学と就職に関するシンポジウムを学内にて開催し、関係者をパネリストとして招聘し、留学支援とグローバル人材のテーマで本研究に関する議論を行った。

4. 研究成果

本研究の成果は以下である。

1. 留学を経験した社会人を対象としたアンケートによる留学経験とグローバル人材についての調査

留学についての詳細な情報、また、社会人生活後、どのように留学が生活に活かしているのか（もしくは活かしていないのか）についての詳細なアンケートを、卒業して1年未満の学生から10年以上の卒業生27名を対象に1年間かけ、実施した。本アンケートは研究初年度及び2年目に向け、国際大会にて協定校関係者から聞き取りをした結果を基に作成した。また、学生に一番近い存在の就職活動を終えたばかりの学生5名にもアンケートを実施し、学生にとって留学は遠いものではなく身近なものであると感じることができるよう工夫した。調査結果は、以下（主要な項目を抜粋）である。まずはそれぞれの項目への回答（はい・いいえ）及びコメントを紹介する。

1. 就職活動の際、留学についてアピールしましたか はい 29名・いいえ 3名

アピールした内容：

- ・ 異文化や新しい環境に対する適応、課題解決能力、語学力
- ・ 留学という目標を達成するために行った準備
- ・ 留学前～留学中の計画性や異文化理解力、対応力
- ・ 留学先での勉強の仕方、多文化の中で生じたトラブルをどう乗り越えたかについて

アピールした理由：

- ・ 海外プロジェクトが多く、多様な国籍の方々と働くことになるため、海外経験それ自体及び海外での自分の行動・学びが実務に直結すると考えたから
- ・ 留学にて苦労したこと、学んだことが勉強以外に沢山あるため、そこでの体験を話すことで面接官に自分のポジティブで積極的な印象を与えることができるため
- ・ 外資系の会社を中心に多くの会社が、様々なバックグラウンドを持つ人と生活をした経験を重要視すると感じたから

2. 就職活動の際、留学について問われましたか はい 25名・いいえ 7名

問われた内容：

- ・ 留学という目標を達成するためにどのような準備をしたか
- ・ 得た様々なバックグラウンドを持つ人と生活をした経験の具体的な内容
- ・ 自分の弱み・強み、それをどのように克服・強化したか

- ・ 具体的にどんな出来事がありどのように対応したか
- ・ 留学先、留学経験、留学後にどのように経験を活かしたか
- ・ エントリーシートでは海外在住期間（半年以上）を記載する部分があり、他の面接でも海外に支店があるところは必ずとっていいほど海外の経験について聞かれた

3. 留学経験は就職活動を行う際、役だったと思いますか はい 31名・いいえ 1名

そう考える理由：

- ・ 留学経験がなければ自信もなく受けれなかったであろう会社を受けることができ、最終的に留学経験を生かしながら海外で働いている
- ・ 留学をしていない人よりも、より幅広い経験があると感じた
- ・ 今では留学が珍しくなくなっているが、やはり長期間の留学（1年ほど）や人がいかないような珍しい国での留学などは話題性があるのか面接官からの質問が多い印象を受けた

4. 現在の職場で留学経験は期待されていると思いますか はい 26名・いいえ 1名

その理由：

- ・ いつかは日本から出て海外で働くことを期待されている
- ・ 英語ができる、異文化を理解できる、物事をグローバルに考えられる、という点は、会社での評価においても有利に働く
- ・ 3年目でNYに赴任のチャンスを受けた。留学経験・語学力はプラスに働く

5. 現在の仕事に留学経験は活かしていますか はい 26名・いいえ 1名

- ・ 入社1年目から語学力を活かした仕事をさせてもらっている
- ・ 英語を話せるということだけではなく、海外生活で困難を乗り越えた経験が活きます
- ・ 会社にはいろいろな人がいて、その人たちそれぞれを受け入れる心構えができた
- ・ 多種多様な人々とのコミュニケーションを比較的円滑に行えるようになったと感じるから

6. 留学しなかったら進路は異なっていたと思いますか はい 26名・いいえ 1名

- ・ そもそも外資系を受けてみようという気にもならなかった可能性が高い
- ・ 留学中に感じたことをきっかけに帰国後から始めた活動が、現在の職業選択に直接している
- ・ 採用面接において企業はグローバル人材かどうかのモノサシを留学経験とTOEICの点数で測ることが多い

- ・ 海外に目を向ける中で、グローバルなビジネスの世界にいち早く身を置きたいと思うようになったため

7. 留学経験のどのような部分が採用の際に評価されたと思いますか

- ・ 留学経験そのもの
そう思う・とてもそう思う 24名
- ・ 留学で身に付けた語学力
そう思う・とてもそう思う 26名
- ・ 留学で学んだ知識やスキル
そう思う・とてもそう思う 28名
- ・ 留学で培った外国人とのコミュニケーション能力
そう思う・とてもそう思う 28名

また、最後に留学にこれから出発する学生及び留学を検討している学生へのメッセージとして以下のようなコメントが添えられていた。

- ・ 留学経験の有無というよりも、企業が見るのはやはり中身。留学そのものはもはや珍しくないです。留学したという事実よりも、留学して自分が何をしたか（専門分野の勉強に全く限らず）、ということがアピールできないと、留学経験を就職活動で役立てるのは難しいと思います。逆に言えば、留学して自分が得たものをきちんとアピールできれば、とても役立つと思います。
- ・ もしも行くか行かないかで悩める余地があるのなら、何のために行くのか？とか、行って何を得てきたいのか？を考えられたうえで、まずは挑戦されることをおすすめします。
- ・ 正直、最近是一年ほどの留学を経験している人の数はとても増えていて、珍しいことでもありません。どれだけ自分が納得できる過ごし方をするかが大切だと思うので、自分が自信を持って人に話ができるように時間を大切に過ごしていただきたいです。
- ・ 留学した経験は、就職活動という端的なものだけにとどまらず、キャリア形成全般においてプラスの影響を与えた。それは、留学経験の中で、多様性に触れ、文化背景の異なる仲間たちとコミュニケーションをとる中で、「私」というものについて日々問われ続け、自分を知る機会になったからである。
- ・ 留学経験は就職活動そのものに対して有益であるというよりも、留学経験によって自身の将来についてより深く、より独自の視点で考えられるようになり、その結果就職活動においても企業側が納得し信頼できる人材として受け止められるのではないかと考えている

以上の調査から、今回の研究のテーマであった、留学がどのように社会人生活に影響を与えているか、改めて理解できたと感じる。また、社会人学生にとっても振り返り作業を社会に出た後おこなうことで、自身の留学経験について再考し、深めることができたのではと感じる。

2. シンポジウム開催

本研究の集大成として成果を発表するため「留学後の就職活動と仕事」-社会人生活から考察する留学経験の意義とその可能性-と題し、シンポジウムを開催した。先のアンケートに回答をした学生5名をパネリストとして招聘し、留学と社会人、就職活動についての公開シンポジウムを開催した。交換留学派遣が決定している学生及び短期留学にて1ヶ月間米国で過ごす学生は必須とし、その他留学に興味のある学生が大勢参加した。5名のパネリストはそれぞれ社会人生活3年目、2年目、そして1年目の学生と就職活動を終えた4年生2名を招聘した。学生には、先のアンケートに関してさらに深めるコメントをしてもらい、学生に留学の意義について問いかけるよう、それぞれ進めていった。質疑応答では質問が終わらず、通常のシンポジウムではあまり想像ができないほどの熱気があり、学生から就職と留学に関してこれほど関心があるのだと改めて認識したと同時に期待に見合う支援、情報提供をしていかなくてはいけないことを感じた。

3. キャリアについて考えるワークショップ開催

2015年及び2016年にSAP JAPAN (<https://www.sap.com/japan/index.html>)の協力を得て留学に行く前の学生に留学にて必要なスキルを就職後まで見据え実施した。2015年度はトライアルとして半日実施、2016年度は留学準備講座の一環とし、終日のワークショップを実施した。ワークショップでは本研究のテーマであるグローバル人材育成に焦点をあて、留学前、留学中、留学後、そして就職について考えさせた。留学予定者全員が参加した。

5. 主な発表論文等

- 〔雑誌論文〕(計1件)
岩城奈巳(2017).「交換留学決定後から出発までの学生支援に関する考察」,名古屋大学国際教育交流センター紀要4号, pp.27-33. 査読有.
- 〔学会発表〕(計2件)
Nami Iwaki (2017). “Effects of study abroad experiences on career outlook and job seeking”, 16th Annual Hawaii

International Conference on Education.

Nami Iwaki (2016). “Study abroad experiences on students’ willingness to communicate: a case study of Japanese university students”, Pan-Pacific Association of Applied Linguistics.

〔図書〕(計 1 件)

孝森めぐみ・岩城奈巳 (2017). 『私たちの交換留学<1>留学を通して学んだこと・名大生からのメッセージ』, 荒川印刷.

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩城 奈巳 (IWAKI, Nami)

名古屋大学・国際機構国際教育交流センター・教授

研究者番号 : 50436987

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし